



哀 歡 抄 (十六)

尾崎 文英^{ぶんえい}

子規虚子と共にある日の漱石忌
たまりし柚子湯身にしむわが浄土
少年の心は果てず去年今年
万両の紅極まれり霧晴れぬ
顔おおいひと一人行く冬の霧



朱唇佛見ているうちにみぞれ降る
原節子深まなざしに寒椿
父の国いつも越後は雪の中
湯けむりに寒猿の目のうるみつつ
良寛の筆跡覚ゆ霜の朝
老女みな二十日正月遅しや
谷鏡ひてまったく鏡ひて雪降りつむ

